

2026年9月15日

T.Kobayashi

今年も九月は甲斐の旅
深田久弥・昇仙峡・酒折宮 そして……

<1> 茅ヶ岳(かやがたけ)への道

中央自動車道を韭崎ICで降りる。一般道へ出ても県道27号線が走っているだけで、何も迷うところはない。ここは海拔 400m余で左へ下っていけば釜無川、右へ上って行けば「昇仙峡ライン」。

甲府盆地の34℃の暑さを逃れるべく右へ曲がり坂を上って行くと少しずつ涼感が感じられるようになる。柳平の集落は海拔 650m、さらに上って行くと海拔950m 地点に茅ヶ岳登山口の駐車場がある。

深田久弥終焉の地として知る人ぞ知る山である。1704mの山頂までは長い尾根を登り続けなければならないが、饅頭峠あたりまで登ると碑が建っている。

登山家でもあり作家・随筆家である深田久弥は、1903年(明治36年)に石川県で生まれた。1971年(昭和46年)3月21日、茅ヶ岳登山中に脳卒中で急逝した。著書「日本百名山」は読売文学賞を受賞し、登山を楽しむ人の愛読書として、多くの人に長く読まれている。

私が昭和59年にこの山に登山した時には、4月なのに山頂に雪が積もっていた。(深田久弥終焉の地:昭和59年4月撮影)

今日は登山が目的ではないので、駐車場の端で24℃の冷気を得るだけ。山から下りてきた人が車の前で着替えをしていた。



<2> 金櫻神社と昇仙峡

茅ヶ岳登山口から昇仙峡ラインを進むと、ほどなくして最高点(海拔 1090m)に達する。人の気配はないが、周辺はどうやら別荘地のような気配。

亀沢川の支流の谷に降りると海拔 730mになるが、まだ涼しさは残っている。支流を遡って、東側の尾根を越えると金櫻神社がある。

金櫻(かなざくら)神社は、第11代崇神天皇の御世(約2000年前)に各地に疫病が蔓延し、各地で神を祀って沈静・平穏をめざした折に、甲斐の國では金峰山山頂に御祭神である少彦名命(すくなひこなのみこと)を祀って、その里宮としてここに社を立てたのが始まりとされている。正式名称は御岳山金櫻神社と言う。祭神は少彦名命だけだったが、12代景行天皇の御世に須佐之男命(すさのおのみこと)、大己貴命(おおなむちのみこと)を合わせて祀るようになった。

建物は昭和30年に火災で焼失したため、のちに建て直された。

武田信玄の息子信繁は、幼時より癪が強く母親は先を案じていた。金櫻神社の「虫切の鈴」に祈願をしたところ治まって、のちに武田氏の武士としても活躍するようになったという逸話もある。

金櫻神社を出て荒川に沿って下って行くと昇仙峡の景観が楽しめるが、緑の木々の中での灰色の岩峰はちよいと味が物足りない。やはり昇仙峡には紅葉が付き物だろう。



*古事記からの情報…(古事記に記された内容から)

少名毘古那神(すくなびこなのかみ)は、神産巢日神(かみむすびのかみ)の指の股からこぼれ落ち

て生まれた御子と言われている。

神産巢日神(かみむすびのかみ)は、高天原に最初に現れた三柱の「天神(あまつかみ)」の一人で、宇宙の生成を司る神と言われた。

崇神天皇(第10代)の時代に伝染病が流行って多くの人々が命を落とした。対策に頭を痛めているさなか、転寝の夢枕に出てきた大物主神の託宣により、天神(あまつかみ)・国神(くにつかみ)の社を造って祀ることにした。これにより災厄は治まって平穏を取り戻した。

<3> 竜王の岡の上から

荒川に沿って下り、敷島を経て穂坂路を横切り竜王に向かう。走りながら、甲府盆地の地形を感じるのが面白い。

荒川の支流である貢川と釜無川に挟まれた台地を少しばかり上った所に住宅地が広がり、その奥に神の湯温泉ホテルがある。住宅地と馴染めないような場所で少々気の毒なホテルだが、湯が良く、食も良く、従業員のマナーも心地よいので、昨年に引き続き一泊することにした。

奥秩父の山からいくつもの巒が甲府盆地に落ちてくる、その尾根の先端が台地になっており、古代より人が住みついていたようで、数々の墳墓や遺跡が見つまっているらしい。台地の先端の海拔310mのホテルの三階の客室からは、甲府盆地がパノラマのように広がり、富士山を始めとした盆地を囲む山々の景観が楽しめる。夜になると、それが夜景として「もうひとつの価値」を産み出す。



翌朝5時過ぎに起きて、窓からカメラを構えてみた。東の空から上る太陽は、高い山を越えなければならないので、盆地が陽光を得るのにはかなり時間がかかる。ひとときわ高い富士山は、その光を受けて姿を現したが、笛吹川と釜無川が合流して富士川となっていくその流れに沿って、水蒸気が立ち上がり、やがて雲の中に姿を隠してしまった。5時44分に望遠レンズで撮った富士は薄っすらとベールを被ったようで、6時半には雲の中に姿を消してしまった。



<4> 酒折(さかおり)宮

甲府駅を出て新宿へ向かう中央本線が、次の酒折駅に入る直前に、線路際(北側)に酒折宮があるが、車窓から気づく人はあまりいないだろう。車で走っても、住宅地の間の路地のような所を抜けた線路際の小道の脇にあり、目立たないし、行きにくい。

倭建命(やまとたけるのみこと)が東征を終えて都に戻る途中で、新治・筑波の山を越えて吾妻を経て甲斐に入り、酒折の地で仮宮を建てて滞在した。

「新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる」と歌うと、篝火を焚いて警護にあたっていた老人が「日日並べ(かがなべ)て 夜には九夜(このや) 日には十日(とうか)を」と返歌した。

倭建命は、この老人を褒めて、東国の国造に任命したと、古事記に書かれている。

また、この歌のやり取りをもって、我が国の連歌の始まりと言われている。(連歌発祥の地)

それにしても、古事記に書かれている時代に「酒折」という地名が存在していたということなので、地名の由来が知りたくなった。調べてみたら、盆地から駆け上がる場所ゆえに「坂(さか)」「折(おれ)」とする説が有力な感じがしてきた。



<5> 勝沼ぶどう郷

旅の最後の目的地は勝沼の「ぶどうの丘」の頂上。行きつけのぶどう園で、ぶどうを買い、一休みして景色を楽しむ。

ぶどうの丘は海拔500m、甲府盆地の東端に位置し、大菩薩山塊から延びてきた尾根が、大滝山(1362m)・棚横手山(1306m)・愛宕山(1091m)と連なり、海拔431mの盆地の淵に吸収されるその山並みが目の前に広がる絶景の場所である。山裾をかすめるように大回りして走る中央本線の列車を見るのにも絶好の場所だ。蒸気機関車の時代には煙が軌跡を描いているのでわかりやすかったが、電化が進んだ今は「レールの響き」だけが頼りになる。「レールの響きが聞こえる山頂」も味わい深い展望台である。



ぶどうの丘を出たあと、勝沼 IC から中央自動車道に入れば、あとは一直線なのだが、私の好みはそういうコースではない。国道20号線(甲州街道)を走り、山間に入り込んで初鹿野(はじかの)を抜け、笹子トンネルに入る。左右から山が迫り、やがて吸い込まれるようにトンネルに入って行く。

長い笹子トンネルを抜けると、左右に迫る山並みから抜け出して、谷間の長い下り坂が続く。

視界が少しずつ広がって、やがて笹子の村落が現れる。街道に沿って並ぶ家並みは、旅籠や休み処が並んでいたことを感じさせる、古い立派な家並が今でも点在する。

この地の酒蔵「笹一酒造」や峠越えの活力の元「笹子餅」の本家もその中のひとつで、これらすべてを含めて、まるでジオラマを見ているような景色が気に入っている。

笹子・初狩と通り抜けて、大月から中央自動車道に入って家路についた。

以上

●参考資料

九月の甲斐の旅(2025年の甲斐の旅)

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/kaitabi.pdf>

二つの荘園と山上の二つの集落(2024年の甲斐の旅)

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/shuraku.pdf>

八月末の甲斐路散歩(2022年の甲斐の旅)

<http://www.l.u-netsurf.ne.jp/~TKOB/kaiji3po.pdf>